

『医経千文』にみる芦東山の医学

町 泉寿郎

二松学舎大学 文学部 中国文学科

【緒言】江戸中期の儒者で仙台藩士（一ノ関出身）の芦東山（1696～1776）は、その伝記に京都遊学中に川原玄達に医学を学んだとあり、大藤修らの先行研究でも「医学者でもあったので医師との交流は広かったとされ、日記にも交流のあった東北地方の医者が散見する。しかし建部清庵など一部の例外を除けば学統などが判明する医者は少ないため、交友から芦東山の医学を窺うことは難しく、その医学に関する造詣は知られていない。本稿では、芦東山が残した医学関連著作『医経千文』を検討材料として、その医学について概観する。

【刊本『医経千文』序跋】従来、著述年代未詳。刊行者長崎健（1799～1864、越中高岡蘭方医、浩齋）による文政11年（1828）の自序「刻磬水先生遺賜医経千文」から、本書は長崎が師大槻磬水（1757～1827、玄沢）から賜ったものであることが分かる。長崎序の次に、大槻磬里（1785～1837、磬水長男、玄幹）による「東山先生小伝」（1829）があり、本書がもと磬水幼時の筆写にかかることとされる。周知のように磬水は芦東山と交流のあった建部清庵に從学（1769～78 江戸出府以前）している。高峰清（1788～1865、犀江、讓吉祖父）跋からは、長崎が幼年から梁・周興嗣「千字文」を酷愛し、長崎の書学の師市河米庵の著書『米庵墨談』に周興嗣「千字文」未使用の千字を以て編纂した清・錢俊選『広千文』に触れるので、新しく「千字文」の作製を思い立ったこと、『医経千文』は長崎が収集した和漢古今「千字文」30余種のうちの一つであったことが知られる。

【医学関連「千字文」諸作と芦東山『医経千文』の関係】『医経千文』巻末の刊記に類似の著作6点の広告が併記されている（1 蘆東民著 長崎浩齋校 医経千文詳解 二巻 嗣出、2 惟宗時俊朝臣撰并註 医家千文 一卷、3 石井意伯著 医学千文考証 二巻、4 伊藤見龍著 医学蒙求 二巻、5 樋口丹台著 医林蒙求 三巻、6 市川尚賢著 医家蒙求 三巻）。芦東山『医経千文』には先行作があるのではないだろうか。2は鎌倉後期、永仁年間（1293～99）の作だが、多紀元簡（1755～1810）が松平定信所蔵古写本から重鈔する以前には紹介されていないので、影響関係はない。3は芦東山の青年期、京都遊学中に出版されており（1719刊）、著者石井意伯（名彰信）は仙台の人であり、仙台藩儒佐久間義和（1653～1736、洞巖）が揮毫しているので、芦東山はこれを意識していると考えられる。同書は医学入門書として優れた内容であるが、重出字が多く、上巻154句・下巻174句、計1312字からなり、形式面で不備がある。456は「千字文」ではなく「蒙求」であり、形式・内容ともに異なる。芦東山『医経千文』は惟宗時俊以来、約450年ぶりに作られた医学に関する、重出なしの漢字1000字を用いた「千字文」である。

【写本『医経千文詳解』2冊について】1から、芦東山『医経千文』がもと注解を伴った著作であったことが分かる。未刊に終わった『医経千文詳解』は富山県高岡市立図書館長崎家文書に伝存する。その奥書によれば、寛延2年（1749）芦東山54歳の年の著作であり、沼倉徳次郎なる人物の所蔵にかかり、大槻磬水から文政9年（1826）7月9日に長崎に貸し出され、長崎自身の手で同8月6日に写本を終えた。芦東山自序に「昔人同字ノ千文アリト雖トモ本式ノコトニ非ス、周氏・胡氏ガ千文ノ如ク必同字ナキヲ以テ正体トス」とあり、その措辞に注力したことが分かる。千字文の本文に和文（カタカナ交り）の注解が施され、内容は初学者向けに素問・靈樞・難経の要旨を注解したものと言える。巻末に附された大槻磬水の長崎宛ての書簡（文政9.6.18付）からは、磬水が芦東山の千字文を「素難之文ヲヨクモ約シ申候事」と感服しつつ、注解無しには十分理解できないと述べ、「西医流モ其原ハコレヨリ出候事ニテ」、「コレヲ不辨時ハ近来訳説ノ精究モ比較出来不申」と、基礎学としての内経医学の重要性を説いている。